

伊藤利之 監修 小池純子, 半澤直美, 高橋秀寿, 橋本圭司 編
こどものリハビリテーション医学 (第3版) 発達支援と療育
 中村春基 (日本作業療法士協会会長)

このたび、伊藤利之先生監修の下、小池純子・半澤直美・高橋秀寿・橋本圭司の4氏を編者に配した『こどものリハビリテーション医学—発達支援と療育 第3版』が医学書院より上梓された。表紙は淡いピンクを基調に、大きさの異なるさまざまな立方体が並んでおり、こどものリハビリテーションの個性・多様性を表現しているかのようだ。

400ページを超える本書は全11章で構成され、各章はさらに節・項に細分化され、医師を中心に理学療法士、作業療法士、言語聴覚士などを含む62名の執筆陣が各テーマに関する最新の知見を過不足なくコンパクトにまとめている。一読してそのテーマの下に知っておくべきエッセンスを理解することができ、紹介されている成書や文献にも大いに興味をそえられる。

本書の特徴は第1章「序論」から如実に示されている。(1) こどもの「障害学」、(2) 障害児をめぐる情勢、(3) 地域療育、(4) 特別支援教育、(5) 家族支援、(6) 社会資源の活用、という内容構成からもうかがえるように、こどものリハビリテーション医学は小児疾患の治療にとどまらず、新生児から乳幼児、学童、成人、老年までを見通した人間のライフステージに寄り添い、生まれてくるこどもをその未来に向けて丸ごと保障しようとする姿勢に貫かれている。したがって、病院で完結するようなりハビリテーション医療を想定して本書を読まれたら、ずいぶんと違和感を覚えるかもしれない。

障害別・疾患別の各論では、近年の解釈と整理、疫学、診断、検査・評価(標準的な発達検査の紹介と臨床的な活用、留意点)、遺伝子診断の最新活用、

臨床上の配慮、家族やこどもの成長への配慮、などが的確に述べられている。この種の書籍では分担執筆によって知識の幅や深度に差がみられ残念に思うことも少なからずあるが、本書に限って言えば読者を失望させる気遣いはない。むしろその充実した内容に驚くばかりであり、医療従事者たるもの常に学ばなければいけないと焦りすら感じてしまう。執筆された先生方の力量はもちろん、監修の伊藤先生をはじめ、編集に当たられた方々の行き届いた配慮と尽力の賜物であると心より敬意を表したい。

さらに、第11章「関連知識」では、(1) 日常生活活動、(2) 児童虐待、(3) ペアレント・トレーニング、(4) 遺伝カウンセリング、(5) 障害児のスポーツ参加、が取り上げられ、この領域の多面的な取り組みの必要性を改めて痛感した。特に児童虐待、ペアレント・トレーニングの内容は、こどものリハビリテーションに携わっていない方にもぜひ読んでいただき、子育てにおける共感や傾聴の重要性を再確認してほしい。そのような意味からも、私なりに本書の感想を一言で述べると、「こどもの成長を支える、愛に満ちた本」であると思う。

監修者が「序」で述べているように、私もまた「本書が私たちの理想とするこどものリハビリテーションを一望できる実践的な成書となること」を祈念する。本書を契機として、この領域の知識・技術がさらに向上・普及し、全てのこどもが幸せに暮らせる社会の実現につながることを願ってやまない。

(B5判 頁416 2017 定価9,000円+税[ISBN978-4-260-03217-9] 医学書院刊)